

本当に係わり合うことの意味

あるデイケアの職員から、中途失明の主婦に関して相談を受けた。

家事、子育ては全てなんとかできるが、困ることは、洗濯物を干していて一人で家の中にいる時に雨が降ってきたことが解る機器等は、何かないかとのこと。

このITの時代、色んなセンサ - がある時代、また天気予報のアメダスもあること、何かあるような気がするので、メル友に「こうした機器をご存じでしたらご紹介ください。」と送信した。

たくさんの返信をいただいた。圧倒的に多かったのは、当然本人はそうしていることが予想されるのに「この頃、良く当たる天気予報を参考にして洗濯物を外に干しては」というもので、期待外れ。また、「テラスに屋根をつけては」等もあった。もちろん、専門相談機関を紹介してくれる方、おむつセンサ - の改良、キットの紹介等、具体的にアドバイスを下さる方もいた（「持つべきものは、良きメル友なり」を実感！）。

私とて「自動乾燥機を買えばいい」とアドバイスはできますが、それだけでは、後々のやりとりが成り立ちませんよね。

現に、その方が日常の中で不便を感じているのですから、その心情に寄り添い、係わり合うことが、こうした方々には必要と僕は考えています。そうした寄り添いの経過の中で、当事者が「ああ、やはり自動乾燥機を買うしかないか……」を選択すれば、それはそれ。

気持ち（心）での寄り添いが、何よりもこうした方々に孤立感を感じさせないために、最も大事なことと思います。「ああ、こうして話を聞いてくれ、私のことをこんなにも気にかけてくださる」という、それこそ共に生きているということを感じてもらうことではないかと思っている。こうした係わりがあればこそ、当事者もまた気軽にいろんな困ることを話してくれる人間関係ができると思う。「何か困ることがあれば、いつでも相談下さい」といいがちであるが、本当に係わり合うことの意味を理解して、そう言ってるかは甚だ疑問である。

施設職員にも、こうしたことの大切さを理解し、利用者に係わり続ける姿勢を学んで欲しく、また、職員にも孤立感を感じさせないようにと、係わり合っている自分であり、故に、メル友に助けを求める自分でもある。

（2003年05月12日記）